

生垣とその作り方

重岡義雄

(一) 生垣の美しさ

札幌で、通称、博士町(ハカセチ)〔南六、西十二附近〕を歩いて、好ましく思うものはオンコの生垣である。そのなかでも某博士の生垣がよく刈込まれ、手入れが行きとどいてるのは実に床しく、さすがに園芸の先生は……と感心した。

ある秋の暮に函館市の郊外で知人の家を訪ねたとき、ドウダンツツジの生垣が夕陽に映えて真紅に輝いているのが目にとまつて、思わず足を止めて見惚れてしまつたことがある。

しかし、生垣はオンコ(イチイ)やドウダンツツジに限つたわけではない。それぞれ土地の風土に適した樹種を用いて、美しい生垣を作ることができる。それなのに、なんのために高い費用をかけて無粋な板塀などを張り廻らすか、トントその心が解らない。まして、そこのザツバ木を寄せ集めて、まるで豚舎の囲いを見るような垣根を作るに至つては、『豚公的な感覚』とそれられても仕方があるまい。

生垣の効用は住宅の保安上大切であるばかりでなく、庭の平面的なものをまとめるという心理的な効果も大きい。すなわち樹木や花壇も生垣のごときもので囲まないと、まとまつた美しさを發揮することができない。これは、丁度、絵画における額縁

の役割と似たところがある。

生垣は苗木を植えて置いただけでは、美しい生垣にはならないが、毎年、一、二度くらい刈込む程度の手入れをしてやれば、いつのまにか立派な生垣になる。駅の狭いプラットホームにも、必ずと言っていいくらい生垣が作られている。これらが、どんなにか旅行者の目を楽しませる事であろう。私も今は生垣に囲まれた豊かな生活環境を作りあげ、美しい祖国の建設に邁進しようではありませんか。

(二) 生垣用の樹種

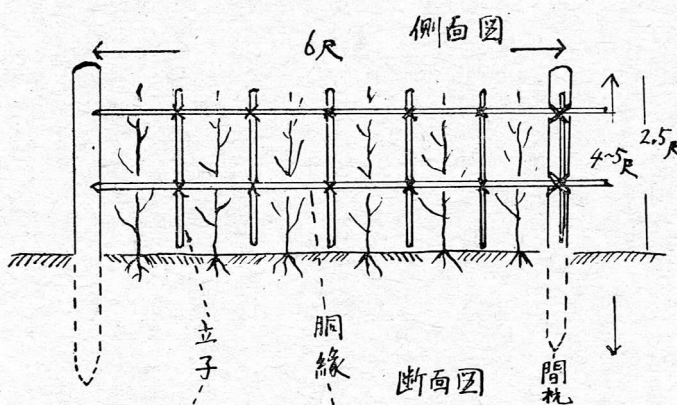
生垣に用いられる樹種には、つぎのような性質をもつものでなければならぬ。

- (1) 枝や葉の量が多く、隙間のできないこと。
- (2) 強健で刈込みに堪えること。
- (3) 枝、葉の萌芽力が旺盛で下枝が枯れ上らぬこと。
- (4) 繁殖や手入れが容易であること。
- (5) その土地に適し、病虫害の少ないこと。

本道ではオンコの生垣が耐久年限も長く、その品位においても生垣中随一であるが、それを任立てるのに多くの費用と年数を要するうらみがある。落葉松の生垣は出来上りも早い、元来この木は陽樹であるから、下枝が早く枯れ上つてしまつて隙間

ができる。ドイットウヒは落葉松ほどでもないが、手入れが悪いと下枝が枯れてくる。イボタの生垣は苗木も安く出来上りも早いので、利用する人が多くなつた。落葉樹であるから冬には葉が落ちるので、冬景色がちよつと淋しい。従来、スモモ、アカシヤなどのごとく刺のある樹種が用いられ

第一図 生垣



ゲ、ニレ、カツラ、イタヤ、ネグンドカエデ、ニシキギ、スモモ、ウコギ、グミ

(三) 作り方

生垣は、普通、直接苗木を地面に植えるが、また、ときには土坡(土堤)や石垣の上に作られることもある。(土坡垣)。

植付の時期は落葉樹は春期発葉前に、常緑針葉樹は五月初頃から未までに植込む。

植付方法は第一図に示すごとく、先ず直徑三、四寸長さ四尺くらいの杭木を生垣の両端に打ち込んで留杭とする。その留杭に糸を張り、その間に六尺間隔に直徑二・五寸余りの杭を打ち込む。これを間杭と呼んでゐる。つぎに苗木を六尺ごとに三本〜六本くらいの割合に植込んで、図の如く立子と胴縁で挟んで行く。かくすることによつて苗木は胴縁の間に固定される。

苗木を植える場所の地摺えは、予め二週間前くらいに幅一・五尺、深さ一尺くらいの溝を掘つてそこに腐熟

たこともあるが、手入れなども厄介なので、特種な用途以外にはあまり用いられない。つぎに本道で生垣に用いられる樹種をあげる。

- 針葉樹 〓 オンコ(イチイ)、ドイットウヒ、ヒバ、落葉松
- 落葉樹 〓 ドウダンツツジ、イボタ、ムク

堆肥を与えて土とよく混ぜて準備して置く。植える場所が砂礫地などでやせておれば、せめて畑土などを植溝に入れるようにしないと活着がよくない。

植付後、数年を経て生垣が一通り出来上つたら、これらの杭や横木(胴縁)を留める必要はない。

土坡垣は宅地の周囲に低い土坡（堤防）を築き、その上に生垣を作るので、宅地と外部との境界をはっきりさせ、庭園の風致を引き立てるのに効果的である。

土坡を築くには、高さが一尺くらの低いものでは、下底は三尺くらしいにし、傾斜は四十五度くらしいの緩やかなものにする。そうすると上面の幅が一尺くらしいとなる。土坡の高さを高くしようとすると、下底の幅も広くしないと傾斜が急になつてうまくない。土坡の幅（厚さ）が狭いと土が乾燥し過ぎたり、寒さが根に浸透してよくない。土坡の作り方は、基礎の部分が堅く締つておれば、それを砕いて、第二図に示したように五、六寸幅に切つた芝生を一列に敷く。これを敷芝という。つぎに敷芝の一端を少しく出して、その上に五、六寸の厚さに土を盛つてよくつきかため、表面に切芝を張り付け、竹串に止める。以下同様にして、敷芝、盛土、張芝を繰返し所定の高さに達せしめる。土坡の土が落着いたら、生垣用の苗木を植える。土坡は平地よりも乾燥し易いから、乾き過ぎないように灌水に注意する。このようにして芝を張ると、降雨などによる土坡面の土の流亡を防ぐばかりでなく、生垣の美しさを引き立てるにも効果がある。

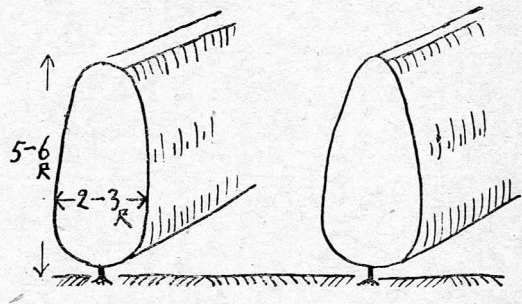
(四) 管理

生垣は手入れをしないで放任して置くと見苦しくなる。よく管理の行き届いた生垣の美しさは、そこに住む人の心のゆかしさを表わしている。管理の主なるものは、刈込、剪根、施肥等である。

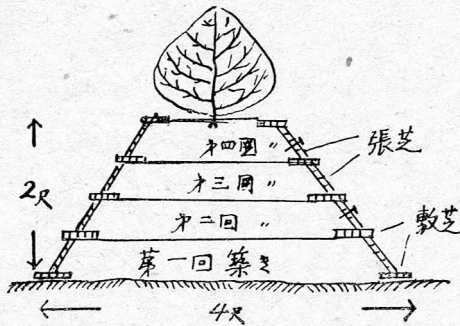
刈込 刈込は生垣の形を整えるばかりでなく、下枝を長く保つために植生上必要

である。すなわち刈込みを行わずに放任すると、樹木はその本性にしたがつて上部の

第三図 生垣の仕立方



第二図 土坡垣



み伸長し、下枝が枯れ上つてくる。

刈込みには刈込欠と言われる大形の欠を

用う。初年目は側方の枝のみに行い、主幹はそのままだに伸ばし、苗木が所定の高き近くに達したら、芯をとめるようにする。その間厚みも適当に考えて刈込みを行い、第三図のような形を目標に仕立てる。

刈込時期は仕立中のものであれば、年二回くらい刈込みを行う。すなわち本道では四月ころの新芽の出ない前と、夏の土用過ぎに行えばよい。秋末の刈込みは寒害を受け易いから差控えたい。一旦、形の出来上つた生垣では、その形を維持するための刈込みであるから、年に一回発葉前かまたは夏の土用過ぎに刈込む。

剪根 これは生垣の根をある範囲に止めおくためと、旺盛な発育を抑制する目的で剪根という作業が行われる。これは根元から三尺くらしいの箇所を休眠期に掘つて根を切るのであるが、これによつて所定内の新根の発生が多くなる。

施肥 施肥はとくに養分の補給を必要とする場合のほかは、普通あまり行われない。すなわち生育遅い木の生長を早めたり、萌芽力を旺盛にするため、またはとくに美観を求める場合などに施肥を行う。この際窒素質肥料の過用をつつし、有機質肥料や加里肥料をせよ与える。

(五) 庭垣

庭垣も生垣の一種であつて、庭園内の境界などに設けられるもので、高さは一・五尺く二尺くらしいの低いものである。たとえは

花園の周囲、主庭と実用園との境、茶庭と主庭との境などに設けられるものであつて、美観を主とするものである。これには低い四つ目垣を添えて作ることもある。これに適する樹種はオンコ（イチイ）ヒバ、ドウタンツツジ、ツツジ、ボケなどである。

（北海道学芸大学教授）

今年も平年並が豫想

されるも

楽観はできない

気象臺長期豫報

札幌管区気象台では三十年度農業奨励会議の席上、三月十二日附で北海道の第一回農業気象長期予報を発表した。これによると大凶凶の危険性は割合少く、昨年のような不順の連続はない模様である。唯今年は五月の前半、後半に低温が現われ易く、六月の中旬、八月の末頃に比較的強い低温がありそうであるから、融雪の遅延、晩霜の危険、水稻等の定植期前後に低温が予想され楽観はできない。

夏の長期予報

今夏の気温は概ね平年並かまたはそれより低くなる可能性が大きくみられるが昨年ほどでない見込で、五月から九月迄の状態を時期別に見ると五月、六月及び九月頃は低温が現われ易く、六月下旬から八月前半の間には二回くらしい気温の異なる時期も期待される。

懸念される比較的強い低温は六月中旬頃と八月下旬頃に見込まれる。雨量は地域差が大きいため詳細は不明だが、昨年のような干ばつではなく盛夏の頃には局地的な大雨が予想される。